



一級建築士事務所(有)ピオ・ハウス・ジャパン

ごあいさつ

子安美知子さん(現:早稲田大学名誉教授)の『ミュンヘンの小学生』と出会ったのは高校生の時でしたが、早稲田大学で建築を学びはじめて、シュタイナー研究が実は早稲田の先生方をとおして、連綿と続いているという事実を知りました。シュタイナーを初めて日本に紹介された今井兼次先生の高弟、池原義郎先生から学部、大学院を通じて設計指導を受けることを許され、その後、上松佑二先生(東海大学)のもとで10年間、助手として身近に接する機会をもちました。何か具体的にというよりも、もの見方、考える道筋を、呼吸するように学ばせていただきました。

前橋工科大学に着任したのは、前橋工業短大から4年制に改組した1997年でした。恩師との出会いに感謝しつつ、大学の教員として、感動する建築という、今井先生が生涯をかけて目指した道を、学生に少しでも伝えつつ、自ら歩んでいきたいと思う日々です。同時に、研究は行為・実践に呼応して、お互いを成長させていくものであるという池原先生の教えを胸に秘め、設計実務を行っています。2004年春に大学発ベンチャーとして(有)ピオ・ハウス・ジャパンを立ち上げ、一級建築士事務所としての活動を始めました。創作活動の拠り所は、シュタイナーの「何が生じるか、問うてみよう」という短い言葉にあります。私のこだわりから自由となり、ふさわしい造形が発見されるために、課題に向きあっています。20世紀のいわゆる機能主義は未完であり、人間の肉体と魂と精神の機能に応じるために、なすべきことはたくさんあると考えています。研究テーマであるバウビオロギー(建築生物学)と呼ぶ、健康な住まいへの希求は、人間の認識に根ざす総合的な建築学であり、2005年春に、仲間とともに日本バウビオロギー研究会を設立し、活動を始めこの春設立10周年を祝いました。ドイツのバウビオロギー研究所(IBN)代表ヴァインフリート・シュナイダー氏と友好関係を築きつつ、日本でのバウビオロギー専門家養成が目下の課題であります。設計業務をとおしてバウビオロギー的建築を探求する日々です。(石川恒夫)



IBN代表ヴァインフリート・シュナイダー氏とともに